

淀城跡発掘調査現地説明会資料



『笹井家本 洛外図屏風』(部分) 大阪府高槻市教育委員会所蔵

2003年12月23日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

淀城跡発掘調査現地説明会資料

2003年12月23日

概要

遺跡名...淀城跡

調査地...京都市伏見区淀池上町

調査期間...2003年11月13日～2004年1月16日（予定）

調査面積...東区 / 約250㎡、西区 / 約140㎡

調査主体...京都市埋蔵文化財研究所

淀城と調査地点のあらまし

桂川、宇治川、木津川が合流する淀は、古くから交通の要所として重要な場所でした。西日本から淀川の水運によって平安京に運び込まれる様々な物資は、「与渡津」（淀の港の意 / 現在の納所・水垂付近）で陸揚げされるのが通例であったようです。中世には川の中島（現在の京阪淀駅周辺）に「魚市」が存在し、都に運び込まれる海産物や塩の販売を掌握していました。また、戦国時代には戦闘の拠点として「淀城」がたびたび史料に登場しますが、これは現在の納所付近に存在したようです。

現在京阪淀駅の北西に隣接して石垣と堀が残る淀城は、廃城になった伏見城にかわる新たな京都護衛の城として元和9年（1623）から寛永2年（1625）にかけて徳川幕府により築かれたものです。最初の城主は松平定綱でした。寛永10年（1633）には新たな城主である永井尚政が入城します。この永井藩政時代に木津川流路の移動による城下町の拡張と屋敷の造成が行われました。次いで、寛文9年（1669）には石川憲之、宝永8年（1711）には戸田光熙、享保2年（1717）には松平乗邑と相次いで城主がかわりました。しかし、享保8年（1723）に稲葉正知が城主となった後は、幕末まで稲葉家が城主をつとめました。歴代城主はいずれも譜代大名ですが、慶応4年（1868）の鳥羽・伏見の戦いでは、敗走する幕府軍を入城させず、官軍側につきしました。このときの戦火で淀の城下町が焼亡しています。

調査地点は、淀城の「東曲輪」内にあたり、現在中央競馬会淀寮となっている長方形の敷地の一角です。東曲輪には、江戸時代を通じて上級武士の住居が存在したようです。この長方形の敷地は淀城を描いた江戸時代の各種の絵図に描かれており、淀城期の地割りを踏襲するものと思われます。現状では周囲より一段高い場所となっています。長方形敷地の北側と東側は外堀跡で、調査区の北端は堀の南肩部分にあたります。

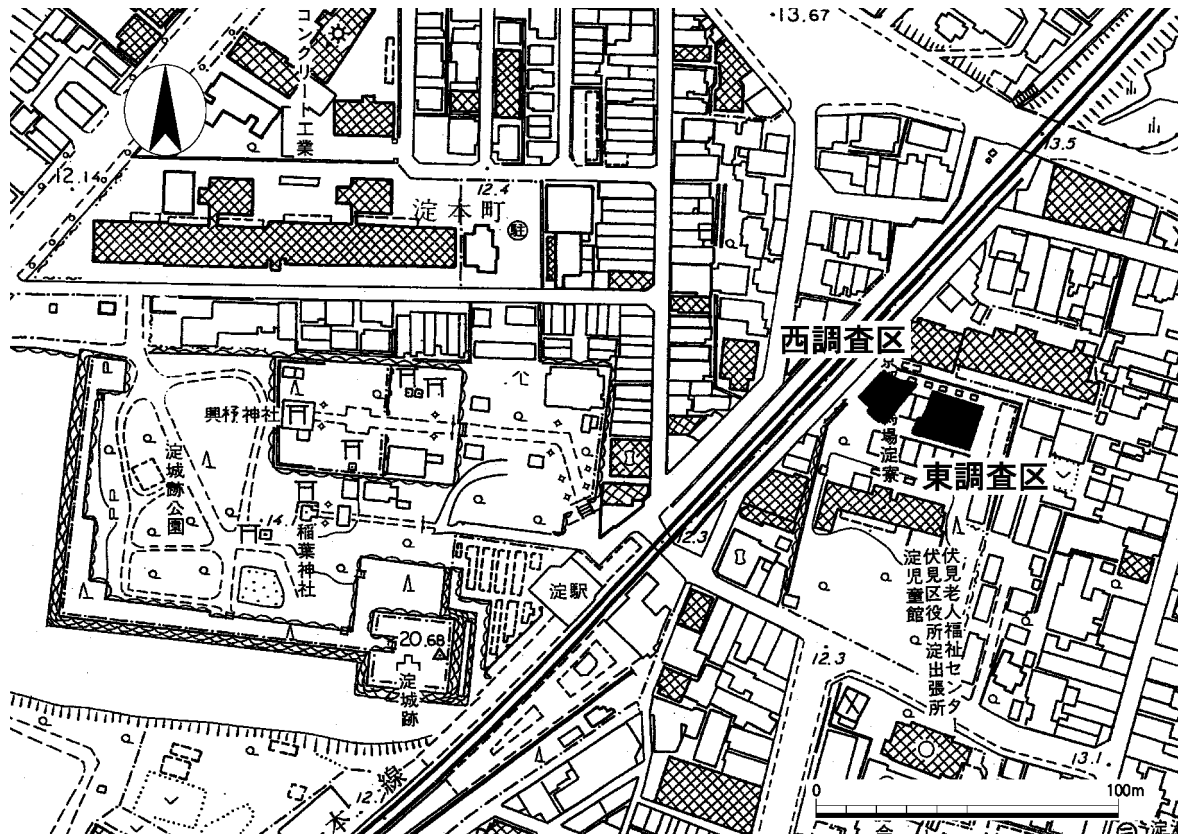
これまでの調査成果

昭和期まで遺存した淀城の外堀の痕跡を見つけました。しかし、外堀の南肩部は現代の石垣がかなり深くまで及んでいて、江戸時代の石垣を見つけることができていません。

堀跡の南側で東西方向の長大な建物跡の一部を検出しました。建物跡は土蔵跡で、土蔵の厚い土壁を支える溝状の基礎跡と、棟を支える礎石跡を検出しています。土壁の基礎跡は幅約1m、深さ1m以上の溝の中に長軸10～50cmの石を詰め込んだもので、長さ37m分を検出しています。西の調査区で南に曲がるコーナー部分を検出しています。この溝状の基礎は2箇所を外壁に直角に取付く部分があり、建物内部が土壁でいくつかの空間に仕切られていたこともわかりました。礎石は石自体が残るものはありませんが、根固めの礫が入った据え付け穴を検出しています。穴の中央には礎石の沈下を防止するため大きな石が据えられています。礎石跡は8間、32m分を検出しています。柱間は約4mあります。礎石跡の列と土壁の基礎は東西方向に平行して延び、この柱間も約4mになっています。全体の規模を復元すると長さ40m以上、幅約8mの東西に細長い建物と考えています。このような規模と構造を有する建物は、一般的に「米蔵」と考えられています。この建物は、淀城を描いた江戸時代の各種の絵図に描かれています。特に、『朝鮮人来聘記』〔付図〕や『山州淀城府内之図』(1750)には「米蔵」、「米クラ」と記されています。また、淀城と城下町の様子を詳細に記録した「淀古今眞佐子」(1753～1762頃)にもこの米蔵のことが記録されています。この建物の時代は今のところはっきりしませんが、17世紀代の絵図に記されていることや地層の状況からみて、淀築城時からそれから間もない江戸時代の前半代に作られたものと考えています。また、江戸時代の各時代の絵図に記載があることから、江戸時代を通じて存在したものと思われる。

建物下の地盤は、軟弱な粗い砂の層です。軟弱な地層の上に重厚な建物を建てるために、入念な基礎工事がなされているようです。一方、建物北側の堀に近い部分では、幅3～5mで泥や粘土質の土で整地がなされています。この部分は土手状の盛土となっており、建物下の砂層はこの土手より南側に人為的に運び込まれたものであることがわかりました。城を作る際に、まず曲輪や屋敷地の縁辺部に粘土質のしっかりとした土で土手を築き、その後内側に河原の砂を充填して造成工事を行っているようです。土蔵の手の込んだ基礎工事と特殊な造成技法は、川の中島の不安定な地盤の上に築かれた淀城の築造技術を知るうえで大変興味深い資料といえるでしょう。

なお、厚さ1m以上ある淀築城期の泥と砂の整地層の下には暗褐色～暗灰色の地層の存在が確認されています。この地層からは14世紀前半の土器が出土しています。これは、淀の中島に中世の人々が暮らした明確な証拠となりました。淀城跡の下層には「淀の魚市」などの中世淀の遺跡が良好に残っている可能性が高くなってきました。



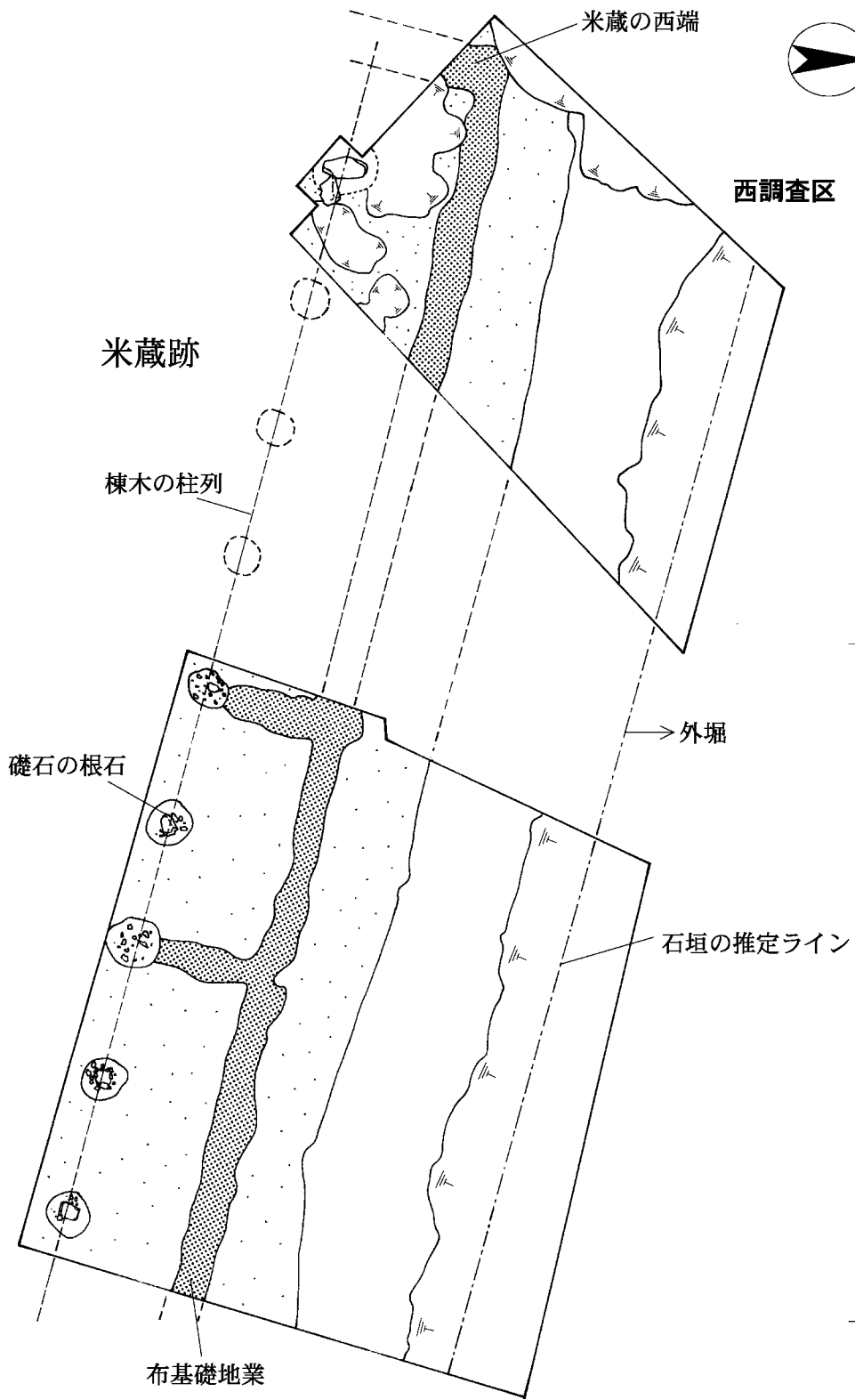
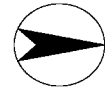
調査区位置図 (1 : 2,500)

淀・淀城関連年表

西暦	和暦	事項
804	延暦23	桓武天皇、「与等津」に行幸する。
810	大同5	葉子の変に際し、「与渡津」に兵を置く。
1188	文治4	淀の「魚市」、初めて文献上に登場する。
1504	永正1	9. 摂津国守護代薬師寺元一、細川政元に謀反。淀城を拠点とする。
1559	永禄2	8. 管領細川氏綱が淀城に入城。
1572	元亀3	7. 淀城の岩成友通、織田信長の攻撃を受け、敗北。
1582	天正10	6. 山崎の戦いで、淀城は明智光秀側の砦となる。
1589	天正17	1. 豊臣秀吉、愛妾茶々(淀殿)の産所に淀城をあて、豊臣秀吉が細川忠興の補佐によって修築する(古淀城)。2. 江北から人夫が徴発され、石垣工事がなされる。3. 淀殿入城。5. 淀殿、秀吉の子棄(鶴松)を生む。9. 鶴松が大坂城に移る。
1594	文禄3	3. 伏見城築城計画に伴い、淀城破却。
1623	元和9	7. 徳川家光、伏見城で將軍職を拝任。これをもって、伏見城廃城。8. 徳川秀忠、松平定綱に伏見城廃城後の京都守護の城として、淀城の築城を命じる(新淀城)。伏見城の建物を移築する予定で天守台を築くが、伏見城天守は二条城に移され、代わりに二条城天守が淀城の天守となる。
1625	寛永2	淀城竣工。松平定綱、3万5千石で新淀城に入城。
1633	寛永10	城主松平定綱所替え。永井尚政が10万石で新城主となる。
1637	寛永14	永井尚政、木津川付け替え工事に着手。
1638	寛永15	木津川付け替え工事竣工し、城下町が広がる。
1723	享保8	稲葉正知、10万2千石で入封。
1756	宝暦6	天守閣炎上。
1868	慶応4	1. 鳥羽伏見の戦いの戦火で城下町炎上。

Y=-25,340

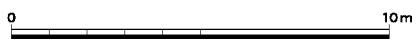
X=-121,740



Y=-25,320

Y=-25,300

東調査区



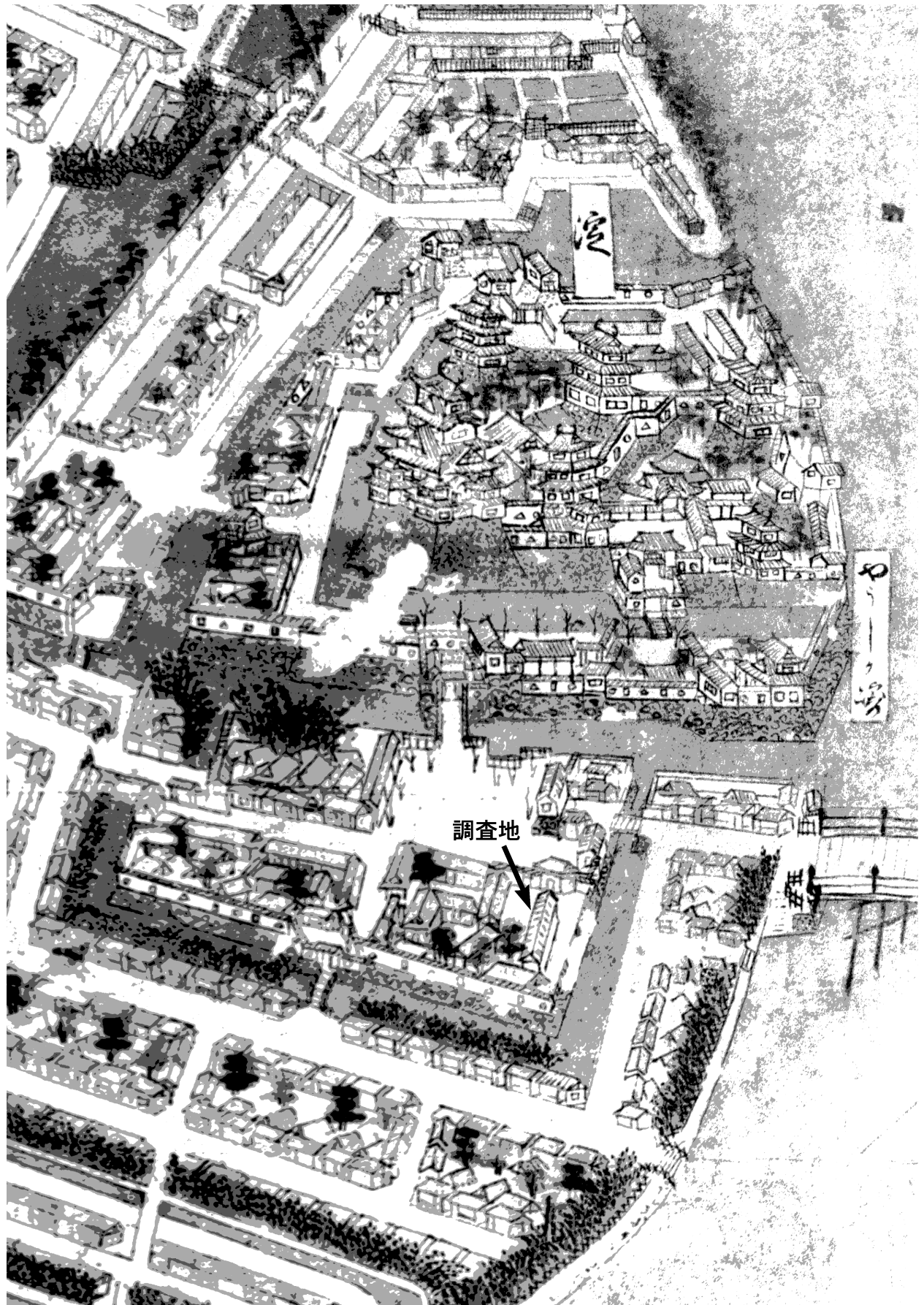
遺構平面図 (1 : 200)



西調査区全景（北西から）



東調査区全景（南東から）



『笹井家本 洛外図屏風』(部分) 大阪府高槻市教育委員会所蔵